

連環の絆

R/NOAH

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

極東支部に入った新型神機使い。ゆるく厳しい仲間。そして「ゴツドイーター」でありながら「神機使い」ではない者との出会いは何を彼にもたらすのか。

そして、第一部隊長との出会い……。

妄想全開のお話です。それでもいいよ！って人以外の方には向いてないかもしれません。

目次

活動記録1	：	朱に交われば赤くなる	1
活動記録2	：	燕雀安んぞ鴻鵠の志を知ら	14
んや			

活動記録1 : 朱に交われれば赤くなる

全ての行動に意味があるとするならば、彼の行動にはどのような意味があるのだろうか。

フェンリル極東支部外部居住区の大通り、そこに1人の少年が佇んでいた。一見すれば何処にでもある光景だ。だが、よく目を凝らせば何がこの少年に奇妙な雰囲気を漂わせているのか分かるだろう。

幼さが残るその右手には白く、赤に染まる神機が、足元には原型を保てていない肉塊が。

少年は一心不乱に神機を肉塊に振り下ろしていた。神機が下に降ろされれば代わりに赤黒い血と肉が少年と神機を赤に染める。

しかし、そう動くようにプログラムされた機械のように彼の手が休まることはなかった。まるで薪割りのように。いや、この時切っていたのは薪ではなくアラガミであったが。

先ほど神機について白く、と言った言葉を使ったが、肉塊に振り下ろす前に赤くなっていた。ただし、その「赤色」は人のものであるが。

突如、サイレンと共に焦っている様子が伝わるほど声を荒げているアナウンスの放送が平穏な空気を切り裂いた。

「うわゝ、こんな事もあるんだねゝ。」

「支部にいる神機使いつて言つてたけど、私達も行くのかな…？」

「それはないでしよゝ、だつて僕等、入隊してまだ1カ月ちよつとだよゝ。」

2人の会話を聞きながら少年は黙っていた。この状況なら行かねばなるまい、だが、1人が言うようにまだ入りたての新人なのだ。このような危機的状況に新人が行つたところで足手まといになる。

先輩神機使いの戦いぶりをみて、彼はそう確信していた。

「でも、このまま手をこまねいて見てるなんて出来ないよ…。」

「…。」

彼女の意見に誰も何も言え無くなった。その時、

「ナズキ、ここにいたか。」

突如、自分の名前を呼ばれ、少年は顔を上げた。上を見ると教官のツバキが立っていた。

「お前にやつてもらふことがある。今の放送は聞いただろう。外部居住区の防衛任務にあたつてもらふ。」

「… えっ… ?」

「多方向からアラガミが侵入していて、人手が足りん。第一部隊は別の任務で出払っている。戦力的にも物量的にも、今のままでは圧倒的に足りない。そこで新人のお前にも出撃してもらおう。」

「えっ… でも… そんな、1人で…」

「誰が1人で行けと言った。同行者は1人居る。第二部隊隊長のタツミだ。」

「… ?!」

「ともかく時間が足りん。急いで出撃準備してくれ。」

「あっ… でも…」

「ナズキ、私が最初に言ったことを忘れたか。ともかく死にたくなければ、私の命令には全て」

「… YESで答えろ…」

「そうだ、頼んだぞ」

そういうとツバキはエレベーターへ向かっていった。

「おく名譽じゃん。張り切って行きなよ」

「… うん」

どうもあの人は苦手だ。あの凜とした目と声に言われたら逆らえない。あれほど怖

い女性は初めてだ。

「大変だと思うけど、頑張つてね、何かあつたらすぐ助けるから…。」

「…うん。」

様々な疑問はあつたが、ともかくナズキは出撃の準備をし、外部居住区へ向かう為、ヘリポートへと向かった。

~~~~~

特に解せない点がある。なぜ「タツミ」が自分と出撃するのか。

第二部隊隊長大森タツミといえ、相当な実力者として有名だ。

大型アラガミ複数体相手に一人で立ち向かえるという。

そんな大人物がなぜ自分と…

「おつ、あんたがナズキか？」

ぼーっとしながらへりに乗り込んだナズキにフレンドリーな雰囲気青年が後ろから話しかけてきた。

「えっ…そうですが…」

「今日はよろしくな！俺は大森タツミ。タツミって呼んでくれ！」

?!?!

（この人がタツミさん…!?想像してたのと全然違う…!）

「…？どうした、そんな鳩が豆鉄砲を食ったような顔して？」

「えっ… いやあの…」

「まあ、ともかく急ごう！こうしてる間にも被害が拡大してるかもしれないからな！」

タツミと名乗る青年の雰囲気飲まれながらもナズキはヘリに乗り込み、外部居住区へと向かった。

「あの… 付かぬ事をお聞きしますが…」

「そんな改まった態度じゃなくて、もつとリラックスしてくれよ。俺も疲れちまうからさ。」

「あつ… あの…。なんで、タツミさんが、その、僕なんかと…」

「… そうだな…」

タツミはさも意外というような表情をして、こう語った。

「お前に期待してるから、かな」

「…？」

「お前みたいに素質のある奴がいればもつともつとすごいことやらせたくなる。俺等が出撃不可能な時、防衛を任せられる。お前に、皆そう期待してるんだぜ。」

「…」

「だから、実地演習として今回の任務に同行して貰ったんだ。」

ナズキにとってこれは嬉しいものでもあった。が、

「なんで『今回』の任務に……？なんで、こんな大変な時に……」

そう、率直な意見をぶつけた。

「そんなもんきまつてるだろ、『習うより慣れろ』、って奴だ。」

「……」

「緊迫した状況で自分が選び取った行動、思考、それこそ、自分にとって一番価値のあるものだ。絶体絶命のなか、見出したその一筋の光明から得られたものをお前に感じてもらいたくてな。」

「……」

「おっと、カッコつけすぎたな。まあ、どうしてお前を選んだかっつのはそういう理由だ。幸い、これから向かうのは被害がまだ少なく、他の部隊が対処してるところに比べりゃ、新人でも何とかなるからな。」

お前がハマしても俺がいるから、安心してくれ！」

「……はいっ……！」

まだ、完全に納得した訳じゃない。でも、タツミといると何とかなる気がしてならぬのだ。

きつと何とかなる。僕はここで強くなれるはず。

~~~~~

(やっぱりひどいな。：)

フェンリルの建造物を見た後だと余計そんな風を感じる。

荒れ果てた家、舗装されていない通路、トタン板を貼り付けただけの屋根、崩れかけた外壁。多くの家が既に崩壊寸前だった。だが、それらの傷跡を見れば随分前からあるように見える。今回のアラガミによる被害ではなさそうだ。

タツミが言っていた通り、想像より外部居住区の被害は少ない。

だが、油断は出来ない。アラガミとの戦いはいつ、何が起きてもおかしくないのだ。

「よしっ。まずは近辺のアラガミの掃討。その後、二手に分かれてこの付近の被害状況を確認。それでいいな？」

「了解です」

タツミの指示に従い、作戦を実行する。

話の通り、タツミの腕は卓越していた。大型アラガミは今回現れなかったのであの話の腕は見られなかったが、その話以上の腕を見られた。一刀のもとに小型アラガミを薙ぎ払い、中型アラガミをもものともしなかった。

(これが『隊長』か。：)

思わず感心していると、

「よしっ。これでここらはおわりだな。」

(あっ… あれ… !?)

気が付けばあつという間に片付いていた。自分が1体倒してる間に、タツミは数体倒していたのだった。

「じゃあ、二手に分かれるか。俺は北の方を見てくる。ナズキは南の方を見てきてくれ。」

「あっ… はい」

「何かあつたら俺に知らせてくれ。信号の使い方は知ってるか?」

「はい、把握しています。」

「頼もしいな!じゃ、任せたぞ!」

「はいっ!」

こうしてタツミと別れた。託される、とは緊張するが嬉しいものでもある。

自分が必要とされてる。

そう思えるだけでナズキはどんな困難にも立ち向かえそうだった。

(やっぱり自分に変なのかもしれないな…)

(でも頑張れるってのはいいことのはずだ… よし!)

気持ちを書きたに南の方角に向かったナズキだが、ふと違和感を覚えた。

(さつきまで感じなかったのに、変な匂いがする。：)

それは鼻の奥まで入り込み、神経を破壊しかねない程の匂いだった。

(物が焦げるような匂い： それに混ざるような獣臭： アラガミか！)

そう思うが早いか突如背後の瓦礫が崩れ、何者かが高く飛び上がった。

(：： オウガテイル：！?でも、何か違う：?)

地に降り立ったそいつは数少ない実戦やターミナルで見たアラガミとはまた違う種類のものだった。ナズキにとつてそのアラガミとは初の邂逅となる時だった。

グオガアアアアアアアアア!!

鼓膜を揺さぶる雄叫びと焦げ付くような匂いがナズキを尻込みさせる。

(負けるか：！僕は新型神機使いなんだ：！)

戦闘意欲を燃やすナズキ。だがそのアラガミの目はナズキを焦点に置いていなかった。

(こいつは何を見てるんだ：)

ふとその視線を追うと瓦礫に埋もれた男性の姿があった。

(なっ：まさか：)

再びアラガミの方をむく。

(…!?)

ナズキは視力には自信がある。見間違えなどあり得ない。だがその目でもあのアラガミの姿を視界に入れることができなかった。

(…ともかく、この人の救助だ…)

瓦礫をどかし、下敷きになっていた人を助け出す。

今までであれば瓦礫をどかす事も、人を抱え出し、引き上げることも出来なかった。神機と適合し、ゴッドイーターとなつてから可能となつたことだ。

…フシユウウウウウ…

悔しいが神機などはアラガミが元となっている。唯一彼がアラガミに感謝する部分である。

(…どうやらこの人、気絶しているみたいだ。)

しやがみ込み、男性の様子を暫定的に見極める。本来であれば、すぐ起こしてやりた
い所だがこの状況ではあまり得策とはいえない。

(取り敢えずタツミさんと呼ばう。)

何かあつたら知らせるといふ指示の元、信号「総員集合」を放つ。

(…2人しか居ないけど、これって遠くまで届くまで唯一の奴だからいいよね…)

…フシユウウウウウ…

： 先程からガス漏れのような音が聞こえる。何か有毒ガスが出ているのかもしれない。早急にここから離れた方が良さそうだ。

(取り敢えずこの人の様子を…)

ルルルル……

グル

!!!

すぐ横にあのアラガミが立って居た。その距離わずか30センチ未満。

そしてそいつは機敏な動きで倒れていた男性を頭から噛み砕いた。

グシャツ……

ガリツ……

バリツバリツ……

グチャツ……

クチュツ……クチュツ……

ゴリツ……

アラガミがかつて人だったものを噛み砕くたび、まだ温かい鮮血と肉片が飛び散る。そのうちいくつかはナズキの身体を紅く染めていった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

狂ったように叫び出し、ナズキはアラガミに神機を振り下ろした。急所に当たったの

か、そいつは意外にも呆気なく死んだ。

「アアアアああああアああアアアアアアアア！」

しかし、ナズキの手が止まる事はなかった。

総員集合の信号を受け、現場に向かったタツミが見たのは先ほどとは違い、純粹で純白な心を醜く変えていったナズキの姿だった。

そう。半狂乱に叫びながらヴァジュラテイルを何度も切り裂いていた、「少年」の姿であつた。

END

活動記録2：燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや

斬れない……いくらやっても手応えが感じられない……

無心となってヴァジュラテイルを斬りつづけていたナズキ。しかし、一向に思い通りにならない「モノ」に苛立ちを覚え始めた。

おとなしくっ……無様な姿につ……なりやがれっ……！

ナズキがいくら新型神機使いとはいえ、まだ新人である。効率よくダメージを与える方法など知るはずもなく、ましてや初見の相手である。殺すことはできたとしても、嬶り殺すことなぞできやしない。

そして、もう一つ。彼が忘れていたことがある。

(……なんだ？少しづつ……戻ってる気が……)

アラガミはコアを抽出しないかぎり、蘇るといふことを。

ガウウウウウウ……

(！)

くはたして怒り狂った新人戦士に

ゴアアアアルアアアアアア!

(なっ…)

くコアを抽出するという冷静な判断ができただろうか。

(なんで…?)

スッ…

「うわああああアアアアアア!」

「おや、起こしてしまったようだね。」

右肩に触られた感触がある。だがそれは、アラガミの牙ではない。

(…えっ…?)

辺りを見渡すとそこは戦場ではなく、ラボであった。

「いや、すまない。どうもうなされていたようだから心配になってしまったね。」

すぐ近くから声がする。

「えっと… 確か…」

「面識があまりないからね。ピンとこないのも無理はないよ。」

私はペイラー榎。この極東支部の支部長だよ。『代理』のね。」

ナズキの肩に乗せられていた手を急いで取り払い、彼はそう言った。

細く、閉じているようにしか見えない目。およそ50歳とは思えないほどの白髪。何を考えているか分からない微笑み。

言われればすぐに分かるのだがすぐにはピンとこなかった。

「あの… 博士、どうして僕が、ここに…？」

「ふむ… 記憶にない、か…。報告通りだね。まあ、簡潔に話すでしょう。」
ペイラーから聞いた話は次のようだった。

あの時、ヴァジュラテイルにとどめの「凶刃」を振るった後、復活した敵の不意打ちを食らいそうになった。そこをタツミに助けられたという。

タツミ曰く、その後急に倒れ込み、いくら呼び掛けても返事をしない放心状態にあったナズキを抱え、一旦帰投した、と。

「そして医務室に運ばれ、精神安定剤などで治療中の君に興味を示した私は、自分のラボに連れ込み、詳しく調べていた、という訳さ。」

「……でも、どうしてここへ……？」

「連れてきた理由かい？ そうだね……。」

意味ありげに笑ったペイラーはこう質問した。

「君は、今の話に疑問を感じなかったかな？」

「……へっ？」

「私の話だよ。いや、正確にはタツミ君の話、かな。」

ナズキには心当たりはなかった。どれも自分が知らないとはいえ、筋が通っていたように感じたからだ。

……いや、ペイラーが自らのラボに自分を連れ込んでいたというのは納得してないが……。

「いえ……特に……。」

「ふむ、そうかい。やはり新人の君には難しかったかな。」

ナズキはこの言葉に少しムツとしたがそんなこと御構い無しにペイラーは語った。

「僕は、タツミ君がアラガミに攻撃されそうだった君を助けた、… といったね？」

「はい…。」

「その直前まで、君はアラガミに切りつけていた、というの？」

「それは… 何より自分が覚えていました。」

「ならばもう気づいてもおかしくないと思うけどね。」

「… えっ…？」

「妙だと思わないかい？いくらコアの抽出を忘れていたとはいえ、

ほんのわずかな間でアラガミが復活するなんて。」

「… そういえば…。」

確かにそうだ。先程の悪夢でも疑問に思っていたのに。気づかなかった。

「そこに、私が君を連れ込んだ理由があるんだ。」

そして再び、意味ありげに彼は笑った。

「どうやら君のオラクル細胞には周りのオラクル細胞を活性化させる特殊な力があるみたいなんだ。」

アラガミ、神機使い問わず、ね。」

「えっ？」

「どうしてそのような事が起こりうるのか。わたしにもとんと検討が付かない。でもこれは事実みたいなんだ。タツミ君も君といた時、妙に調子が良かった、と言っているからね。だから気になって、このラボに連れ込んだんだ。」

「そう、だったんですか…。」

にわかには信じられなかった。そのような不思議な力があるというのは。そして、認められなかった。

(アラガミ、神機使い問わず、ね。)

自分がいる事で、アラガミが強くなる。それは神機使いとして許せる事ではなかった。

「博士…。やっぱり、僕、クビですか…？」

不安ゆえにそう聞いた。いるだけで他の神機使いの邪魔となる。

そんな人材はいらないはずだから。

「うん？そんな事は無いよ？むしろ有難い事なんだ。その力はね。」

…？

「それって… どういう…」

「詳しい話は、いずれ分かるよ。」

ナズキの話を遮り、ペイラーはそう答えた。

「さて、やりたい事はあらかた済んだ。仲間も心配しているみたいだし、そろそろ戻った方がいいんじゃないかな。」

後ろを向き、振り返ることなくそう言った。

（一体… 何を考えているんだろう…？）

「そうそう、一つ気になることがあるんだ。」

「あつ…：はい、なんででしょう?」

「先程、私は自己紹介で支部長、と言ったはずだが、君は私のことを

迷わず博士、と言ったね?」

「えつ、あつ、あの…：」

「何、少し嬉しくてね。支部長に就任してから久しくそう呼ばれなくてね。私もまだまだ博士として受け止めてもらえているんだな、って

思ったんだ。」

てつきり怒られるもんだと思っていたナズキはその話を、驚いた顔で聞いていた。
(やつぱり、何考えているのか、分からない…：)

「やはり根が研究者だからね。支部長としているより、研究室にこもって実験している方が、性にあっているんだ。」

さあ、無駄話はここまで。君にもまだまだやってもらおうことがいっぱいあるからね

！」

振り向きながら笑ったペイラーはそう話し、ナズキの背中を軽く叩いた。

その感触に、ナズキは

(くよくよせず進め)

といったメツセージが込められているような気がした。

「……はいっ！行つてきます！」

疑問こそあるものの、ナズキは自分に与えられた使命をこなそうと思つた。

(アラガミが強くなるなら、僕はもつと強くなればいい。足を引つ張らないように、いや、むしろ自分がリードする気で行くんだ！)

力強くラボを飛び出たその足取りに、迷いはなかった。

「……そう、ナズキ君。君はとても大切な存在なんだ。その不思議な力。もはや必要不可欠な力なんだよ。」

…
『彼』の為にも、
ね…

E
N
D